

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES



要覧 2002

目 次

概 要

所長あいさつ	1
沿革	2
研究組織	4
研究組織構成	5
研究スタッフ	7
運営諮問委員・専門委員	14
歳 出	15
情報資源利用研究センター	16

共同利用

共同研究プロジェクト	18
短期共同研究員	28
国際シンポジウム	29
外国人研究者招へい	30
外国研究機関との共同研究	31
海外学術調査総括班	32
図書資料コレクション	33

研究・教育活動

競争的研究経費など	34
長期研究者派遣	36
言語研修	37
音声学解析	38
大学院	39
日本学術振興会特別研究員 (PD)	39
研究生	39
研究成果の公開	40

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES AND CULTURES
OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

3-11-1, ASAHI-CHO, FUCHU-SHI, TOKYO 183-8534
TEL:042-330-5600 FAX:042-330-5610

所長あいさつ

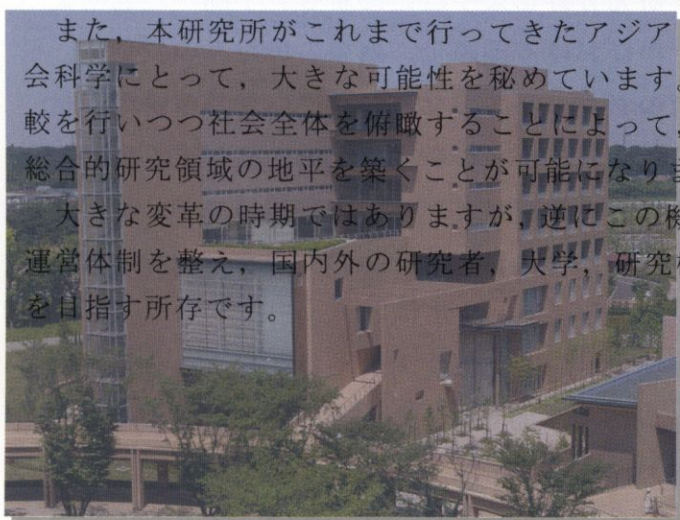
2002年2月、本研究所は、1964年の創設以来慣れ親しんだ下町の情緒を残す北区西ヶ原から、開放感に満ちた郊外の雰囲気漂わせる東外大府中キャンパス内の新たなAA研棟へ移転いたしました。新たなAA研棟は、旧キャンパスでのイメージを一新し、空間的にも余裕の感じられるデザイン、レイアウトになっています。大きな変革期に、新しい研究棟を得て、本研究所は新たな飛躍を目指そうとしています。

アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究等を目的とする共同利用研究所として設置された本研究所は、共同研究や海外調査の組織、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野における主導的な役割を果たしてきました。

「グローバル化」が喧伝される今日、「アジア・アフリカ」という概念は国際政治の舞台においては重要性を失いつつあるかのように見えます。しかし、人の移動や情報の伝達によって、アジア・アフリカとの接触の機会が増えるにつれ、その言語や文化に関する詳細な知識の必要性は、むしろ増大しています。とりわけ、「グローバル化」が、単に一握りの言語や文化の支配的な地位をさらに強化させるのではなく、人類社会の共存・共生、将来にわたる豊かな文化の創造のために、共通の問題認識を生みだし、制度、価値の相克を克服する方向を目指すとするれば、「アジア・アフリカ」という言葉で代表されてきた言語、文化の研究は、これまで以上に重要な意味を持ちます。本研究所は従来にもまして重大な任務を課せられているといえましょう。

また、本研究所がこれまで行ってきたアジア・アフリカにおける臨地調査は、人文社会科学にとって、大きな可能性を秘めています。言語と文化を核に共時的・通時的な比較を行いつつ社会全体を俯瞰することによって、これまでの学問分野を越えたあらたな総合的研究領域の地平を築くことが可能になります。

大きな変革の時期ではありますが、逆にこの機会を捉えて、さらに広く開かれた研究・運営体制を整え、国内外の研究者、大学、研究機関のための研究所として、一層の飛躍を目指す所存です。



東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
所長 宮崎 恒二

沿革

第二次世界大戦後、バンドン会議などを通じて、日本の将来にとって、アジア・アフリカ諸国との相互理解、相互協力を進めていくことの重要性が認識されるようになりました。そこで、1961（昭和 36）年、日本学術会議はこれら諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告し、1964（昭和 39）年に、アジア・アフリカ言語文化研究所がわが国では初めての人文科学・社会科学系の共同利用研究所として、東京外国語大学に附置されました。その具体的な設置目的は、次のようにまとめられます。

- 1) アジア・アフリカの諸言語の研究、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典をつくること
- 3) それらの言語の修得を助けるため、言語研修を実施すること

共同利用研究所としての本研究所は、全国のあるいは海外の研究機関に属する専門の研究者とともに共同研究を行い、これらの学者に設備や資料を提供することなどを通して、上記の設置目的を達成し、日本あるいは世界における人文・社会科学の研究の進展に寄与することを使命としてきました。

発足当初は、本研究所ではアジア・アフリカの個別の地域についての深い理解を目指し、言語学・歴史学・民族学などの視点から密度の濃い研究がなされました。しかし、設立以来 30 年以上を経過し、本研究所をとりまく諸事情は大きく変化しました。学界では、既存の学問体系に依拠した個別的な研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築への要請が高まってきました。それは、近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象、経済のグローバル化などの急速な世界情勢の変化、及び狭い地域的枠組みにとらわれない広域な視野からの研究の必要性に対する認識の深まりなどと関連しています。他方、最近における情報処理技術の発達の中で、文字のみならず音声や画像の処理が可能になり、さらにこれらをひとつの情報ネットワークに統合化する研究が急速に進展してきています。

このような内外の情勢に対応し学問研究においてより先導的な役割を果たすために、本研究所は 1991（平成 3）年度に研究体制の抜本的見直しをおこない、従来の小部門制（及び 1 客員部門）から 4 大部門制（及び 1 客員部門）をとることとなりました。4 大部門制では、言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する体制を整え、また広域的なフィールドワークや共同研究を通して、幅広い研究者の英知を結集した研究、

情報の統合的処理の理論と方法の開発を目指しました。

1995（平成7）年度には、本研究所は文部省（当時）から「卓越した研究拠点（COE）」に指定され、「中核的研究機関支援プログラム」のもとで、設備の充実、国際シンポジウムの開催、研究資料のデータベース化とその発信などにつとめてきました。加えて、2001（平成13）年度には、5年にわたる中核的研究拠点形成プログラム（2002（平成14）年度からは、文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行）「アジア書字コーパス拠点」が新たに発足し、従来にもましてアジア・アフリカ地域の言語文化研究において先導的役割を果たすことになりました。

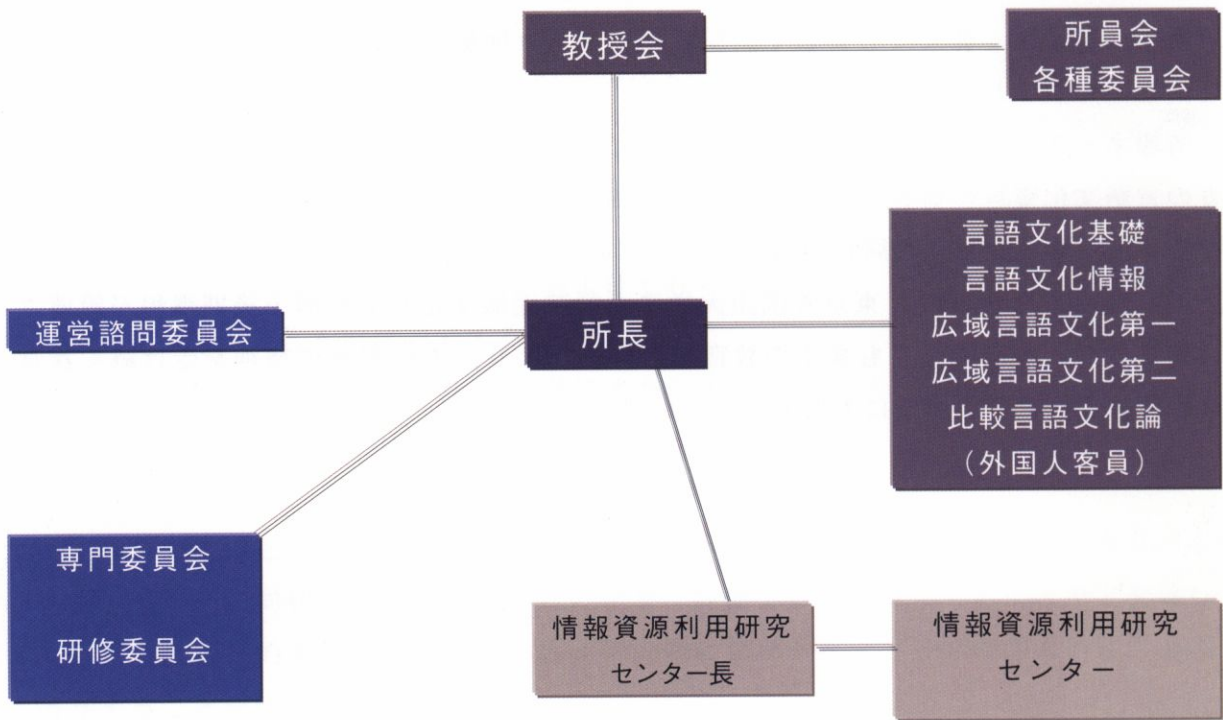
情報ネットワーク化の目覚ましい技術革新に関しては、これを活用したアジア・アフリカの言語文化資料の情報資源化をめざし、1997（平成9）年度より附属情報資源利用研究センターを設置し、共同利用研究所としての更なる発展を目指しています。

この他、1992年には、東京外国語大学に大学院地域文化研究科博士後期課程が設置されましたが、本研究所でも多くの教官がこれに加わり、本研究所の精神を受け継ぐ次世代の優秀な研究者の育成にも取り組んでいます。

歴代所長

岡 正雄	1964-1972 年
徳永康元	1972-1974 年
北村 甫	1974-1983 年
梅田博之	1983-1989 年
山口昌男	1989-1991 年
上岡弘二	1991-1995 年
池端雪浦	1995-1997 年
石井 溥	1997-2001 年
宮崎恒二	2001 年-現在

研究組織



(2002年4月1日現在)

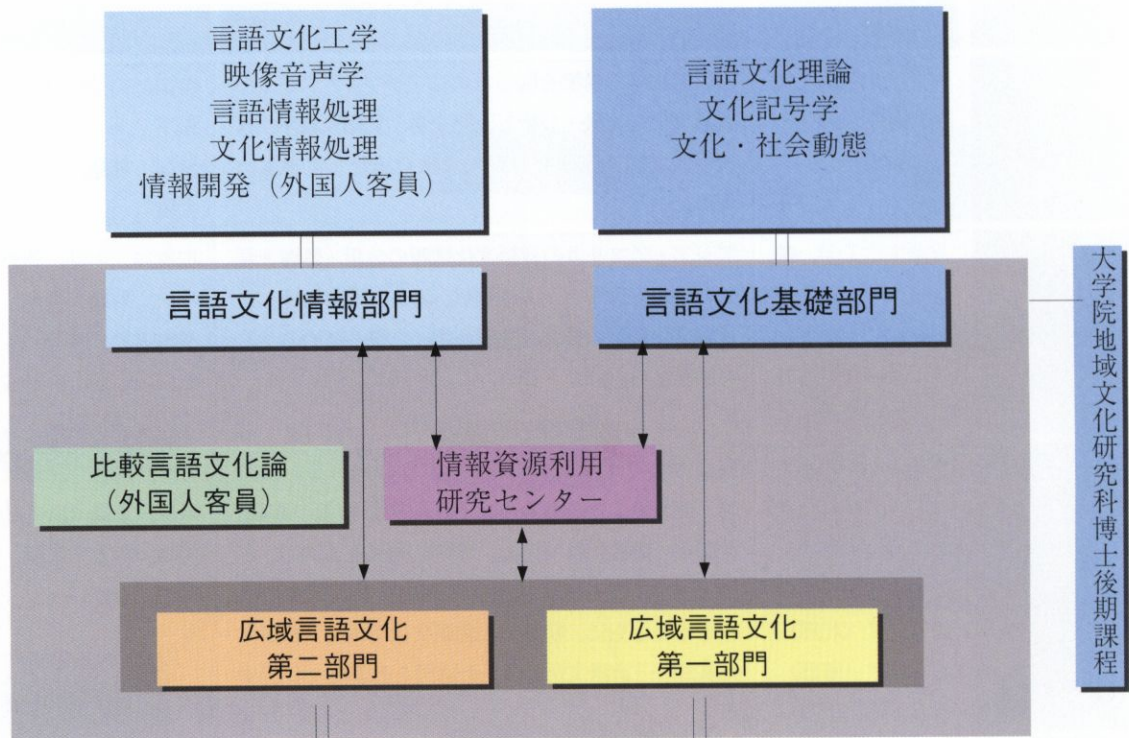
区分	教授	助教授	講師	助手	計
定員	(5) 19	18	0	5	(5) 42

() は外国人客員数を外数で示す

研究組織構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	町田(センター長/併任), 松下 飯塚, 真島, 河合, 近藤 太田
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理, 情報開発(外国人研究員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, および情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	加賀谷, 中見, 芝野 小田, 菊澤, 豊島 澤田, 星 Wufela, André Yaek'olingo (外国人研究員)
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア(北部), 南アジア(南部)の各言語文化圏	東はオセアニアより西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人, 物, 情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	石井, 新谷, ダニエルス, 峰岸, 宮崎(所長/併任) 栗原, 呉人, 三尾, 床呂 陶安, 塩原
広域言語文化 第二	西アジア(アラブ), 西アジア(非アラブ), アフリカ(東部・南部), アフリカ(西部・中部)の各言語文化圏	西アジア, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究をおこない, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	内堀, 小川, 梶 黒木, 高知尾, 永原, 羽田, 深澤
比較言語文化論 (外国人研究員)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者(特にアジア・アフリカ諸国)を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	Jose, Lydia Yu Menski, Werner Friedhelm Sutjaja, I Gusti Made
情報資源利用研究センター		アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と, それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進する。	バースカララーオ, 高島 中山, 根本, 西井 Horstmann, Alexander Klaus (外国人研究員)

動的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究組織構成図



研究スタッフ

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

教 授

石井 溥 (ISHII, Hiroshi)

1. 南アジアの人類学
2. i. ネパールの社会変化および民族・カースト認識研究 ii. 北部南アジアの多言語状況研究 (科学研究費補助金) iii. ネパール語の基礎的研究 (2002 年度 AA 研言語研修関連) iv. 海外学術調査・フィールドワークの手法研究 (科学研究費補助金) [通称「海外学術調査総括班」関連]
3. <http://www.aa.tufts.ac.jp/~hishii/index.html>

内堀基光 (UCHIBORI, Motomitsu)

1. 東南アジア (オーストロネシア) 民族学
2. i. サラワク先住民の自然環境認識に関する現地調査 (科学研究費補助金) ii. マダガスカルにおける森の文化的意味の研究 (科学研究費補助金) iii. 日本人文化人類学者のフィールドワークの特性 (三菱財団研究補助金) iv. 資源に関する人類学的総合研究
3. <http://www.aa.tufts.ac.jp/~muc/>

小川 了 (OGAWA, Ryo)

1. 西アフリカの民族学
2. 18, 19 世紀のセネガルとフランスの関係

加賀谷良平 (KAGAYA, Ryohei)

1. アフリカの言語学 (バントゥ諸語, コイサン諸語), 音声科学
2. i. ウガンダのバントゥ諸語の分析 ii. バントゥ諸語と日本語アクセントとの比較研究とその弁別特徴の研究 iii. 語彙集資料の作成

梶 茂樹 (KAJI, Shigeki)

1. アフリカの言語, 特にバントゥ系諸語の研究
2. i. アンコーレ語などウガンダ西部の言語の研究 ii. tone の国際シンポジウムの開催

芝野耕司 (SHIBANO, Kohji)

1. マルチメディアデータベース, 多言語情報処理, CALL
2. マルチメディアデータベース言語設計, 日本語組版, コンピュータ支援による言語教育環境及び e-learning 環境の研究

新谷忠彦 (SHINTANI, Tadahiko L. A.)

1. 言語音変化の類型的研究
2. カレン諸語の比較研究

クリスチャン ダニエルス (DANIELS, Christian)

1. 16-20 世紀中国史における社会, 経済及び技術

高島 淳 (TAKASHIMA, Jun)

1. 宗教学・インド宗教史 (ヒンドゥー教), 言語情報処理
2. i. シヴァ教の寺院儀礼と思想についての研究 ii. 多言語処理システムの開発研究 (科学研究費補助金) iii. インド聖典データベースの構築 (GICAS: 特別推進研究 (COE)) iv. インド系文字の発展に関する研究 (GICAS: 特別推進研究 (COE)) v. 中世インドのヒンドゥー教タントリズムと諸宗教のかかわりについての研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html>

中見立夫 (NAKAMI, Tatsuo)

1. 東アジア・内陸アジアの国際関係史
2. i. 「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト (AA 研共同研究プロジェクト) ii. 近代モンゴル語出版資料の社会的研究 (科学研究費補助金) iii. 台湾中央研究院歴史語言研究所蔵満洲語文書の研究 (サントリー財団)

ペーリ・バースカララーオ (BHASKARAO, Peri)

1. 南アジアの諸言語, 音声学
2. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html>

町田和彦 (MACHIDA, Kazuhiko)

1. 南アジアの言語学
2. i. インド系文字の構造と歴史 (GICAS: 特別推進研究 (COE)) ii. ヒンディー語電子辞書 (GICAS, 情報資源利用研究センター) iii. 多言語機械翻訳システムの評価研究 (国際情報化協力センターとの共同研究)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~kmach/index.html>

松下周二 (MATSUSHITA, Shuji)

1. アフリカの言語
2. i. ハウサ語の方言と, リンガ・フランカとしてのハウサ語の伸張ダイナミズム ii. 西チャド語グループ言語の研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~mshuji/>

峰岸真琴 (MINEGISHI, Makoto)

1. 東南アジア, 南アジアの言語学および言語類型論
2. i. 孤立語を視野に入れた言語基礎論の研究 ii. タイ系, クメール系など, 東南アジアのインド系文字に関する研究 (GICAS: 特別推進研究 (COE)) iii. インド系文字のコンピュータ上の実装に関する研究 (「古典学の再構築」科学研究費補助金) iv. タイ, インドの少数民族言語の研究 (「危機言語」科学研究費補助金) v. コーパス利用に基づく東南アジア諸言語の運用理論研究 (東外大学内研究プロジェクト)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html>

宮崎恒二 (MIYAZAKI, Koji)

1. オーストロネシア社会
2. i. ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎの人類学的研究 (科学研究費補助金) ii. 移動と越境 (重点共同研究プロジェクト「アフリカ・アジアにおける政治文化の動態」の研究班)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html>

助 教 授

飯塚正人 (IIZUKA, Masato)

1. イスラーム学・中東地域研究
2. i. アル＝アフガーニーと近現代イスラームの思想・運動の研究 (AA 研共同研究プロジェクト) ii. イスラーム古典における死生観と生命倫理の研究 (科学研究費補助金) iii. 1990 年代半ば以降のジハード理論の変容と実践の研究 (科学研究費補助金)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~masato/index.html>

小田淳一 (ODA, Jun'ichi)

1. 計量文献学
2. i. 民話の計量的比較研究 ii. 情報修辞学 (AA 研共同研究プロジェクト) iii. 物語の自動生成 (総合研究大学院大学共同研究) iv. 文字法の認知学的研究 (GICAS: 特別推進研究(COE))
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html>

河合香吏 (KAWAI, Kaori)

1. 人類学, 東アフリカ牧畜民研究
2. i. ウガンダ・カラモジャの牧畜社会における土地・自然資源をめぐる認識・利用・領有に関する調査・研究 ii. 東アフリカ牧畜社会における集団間関係, およびレイディングの現代的意味に関する研究 iii. 自然観・環境認識と身体論

菊澤律子 (KIKUSAWA, Ritsuko)

1. i. 言語学(比較統語論・言語接触と変化・言語類型論・文法記述) ii. オーストロネシア諸祖語の再建(とくに統語構造)と先史における民族移動 iii. フィジー諸語方言の記述 iv. タロイモに関する学際的研究
2. i. オーストロネシア諸語の人称代名詞に関する比較統語論的研究 ii. オセアニア諸語の格構造の変化 iii. インターネットにおける言語使用 iv. 日本語敬語使用の変化への統語論的アプローチ
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~ritsuko/>

栗原浩英 (KURIHARA, Hirohide)

1. ベトナム現代史
2. i. ホー・チ・ミンとスターリン: 初期のソ連・ベトナム関係 (1945~1954) ii. インターナショナリズムの史的研究 (AA 研共同研究プロジェクト) iii. インドシナにおける複合回廊の形成と展望 (科学研究費補助金)

呉人徳司 (KUREBITO, Tokusu)

1. 言語学, チュクチ語
2. i. 海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学, 言語人類学的研究 ii. 消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的調査・記述方法の研究 iii. 言語類型論の研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/>

黒木英充 (KUROKI, Hidemitsu)

1. 中東地域研究・東アラブ近代史
2. i. オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する基礎研究 ii. 多言語環境と多重言語使用の歴史の実態に関する研究 iii. オスマン帝国における国際・地域間コミュニケーション・システムの研究 (国際交流基金派遣フェローシップ)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/>

近藤信彰 (KONDO, Nobuaki)

1. イラン近代史
2. i. 宗教寄進文書の分析による 19 世紀テヘランの都市史研究 ii. シーア派ウラマーの法的勧告に関する研究
iii. ペルシア語文化圏における文字資料の収集と電子化(GICAS : 特別推進研究(COE))

高知尾 仁 (TAKACHIO, Hitoshi)

1. 文化人類学・人類学精神史
2. i. 近代エチオピア表象論 ii. 啓蒙期の言語文化表象 iii. imperium の言説と表象に関する基本研究

床呂郁哉 (TOKORO, Ikuya)

1. 東南アジア島嶼部の人類学

豊島正之 (TOYOSHIMA, Masayuki)

1. 中世日本語文献学(特にキリシタン文献)
2. i. キリシタン文献活字字体のデータベース構築(科学研究費補助金) ii. 玉塵抄・韻府群玉の注被注関係の XML による表現と、それに基づくデータベース構築(科学研究費補助金) iii. 既刊「国語学」全文データベース構築(科学研究費補助金) iv. 三省堂「言語学大辞典」データベース構築(科学研究費補助金) v. 日本植民地期台湾の言語学・民族学資料についての整理・分析(AA 研共同研究プロジェクト・データベース構築プロジェクト(情報資源利用研究センター)・蔣経国国際学术交流基金会プロジェクト(台湾)) vi. 漢字字体史研究のための関連資料収集の継続(GICAS : 特別推進研究(COE)) vii. 「主婦談話資料」「固有名詞資料」等、昨年度の情報資源利用研究センタープロジェクトによるコーパス構築の継続と改良
3. <http://jcs.aa.tufs.ac.jp/mtoyo/>

永原陽子 (NAGAHARA, Yoko)

1. 南部アフリカの歴史・帝国主義の歴史
2. i. 南部アフリカ人種関係史における「混血」と「クレオール」についての研究(科学研究費補助金) ii. 南アフリカにおける「国民和解」と歴史認識にかんする研究 iii. アフリカ女性史にかんする研究(国立民族学博物館地域研究企画交流センターとの連携研究プロジェクト)

中山俊秀 (NAKAYAMA, Toshihide)

1. 北米北西海岸諸言語、形態・統語論、言語類型論
2. i. ヌートカ語文法記述 ii. ヌートカ語テキスト資料の整理・分析・編集(科学研究費補助金) iii. ニティナト語資料の整理・分析 iv. 言語分析のソフトウェアツールの開発
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nakayama/>

西井涼子 (NISHII, Ryoko)

1. 東南アジア大陸部の人類学
2. i. 南タイにおけるムスリム・仏教徒混住地域における実践宗教 ii. 人類学研究における「社会空間」についての考察(AA 研共同研究プロジェクト「社会空間と変容する宗教」) iii. タイのムスリム社会におけるジャウィ語(マレー語のアラビア語表記)使用についての予備調査
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/>

根本 敬 (NEMOTO, Kei)

1. ビルマ近現代史
2. i. 日本占領期ビルマ(1942-45年)に関する総合的歴史研究」(AA 研共同研究プロジェクト・トヨタ財団計画助成研究) 主査としての企画・運営, およびビルマにおける当時の関係公文書調査 ii. 「ビルマ地誌データベース構築」(情報資源利用研究センター主導データベース構築) 第二次作業への取り組み iii. 「日英和解とビルマとの関係」に関する研究の推進 iv. ビルマ通史の執筆(単行本として出版予定) v. ビルマ研究国際会議(9月・スウェーデン)における近代史パネルの企画・運営・コメント担当準備 vi. 東南アジア通史概説書(共著)の完成に向けての最終執筆・相互調整
3. <http://coe.aa.tufs.ac.jp/knemoto/>

羽田亨一 (HANEDA, Koichi)

1. サファヴィー朝期イラン文化史
2. i. 『ロスタム・ハーン史』の研究 ii. ラシードウ・ウッディーン序・監修『タンスーク・ナーメ』(王叔和『脉訣』のペルシャ語訳本)の研究 iii. 「ペルシア語文化圏に於ける文字資料の収集と収集資料のデジタル化」(GICAS: 特別推進研究(COE))

深澤 秀夫 (FUKAZAWA, HIDEO)

1. マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2. i. ラウンバーナとラベアリヴェルの二人を通して見たマダガスカル近代における読み書き能力の効用についての考察(AA 研共同研究プロジェクト) ii. 「1895年マジュンガからアンタナナリヴへの道: 戦記という旅の表象」の執筆(AA 研共同研究プロジェクト) iii. 2003年度言語研修マダガスカル語の準備
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>

真島一郎 (MAJIMA, Ichiro)

1. 西アフリカの人類学
2. i. アマドゥ・クルマのマリンケ語表現に関する研究 ii. セネガル学生運動史における「1968年5月事件」の研究 iii. コートディヴォワール村落地域での住み込み調査 iv. シェイク・アンタ・ディオブとヨロ＝ラゴ教の関わりをめぐる研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/>

三尾裕子 (MIO, Yuko)

1. 東アジアの人類学
2. i. 台湾漢人の社会変動と宗教についての研究 ii. 日本植民地期台湾の言語学・民族学資料についての整理・分析(AA 研共同研究プロジェクト・データベース構築プロジェクト(情報資源利用研究センター)・蔣経国国際学術交流基金会プロジェクト(台湾)) iii. ベトナム華人研究及び「環中国海(環シナ海)の文書史料の電子化」(GICAS: 特別推進研究(COE))
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/>

助 手

太田信宏 (OTA, Nobuhiro)

1. 南アジアの歴史
2. i. 近世南アジアにおける国家的儀礼と政治文化の研究 ii. 南インド史上の商人集団の社会的結合形態とその歴史の変遷の研究 iii. ヒンドゥー教僧院所蔵文書の調査

澤田英夫 (SAWADA, Hideo)

1. カチン州および東北インドのチベット・ビルマ系言語の記述的研究
2. i. ロンウォー語 (マル語) の文法記述 ii. 「東南アジア諸文字の源流と発展 (特にビルマ文字の体系や字形の変遷に関するデータベースの構築)」 (GICAS : 特別推進研究(COE))
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/profile-sjis.htm>

塩原朝子 (SHIOHARA, Asako)

1. 言語学, インドネシアの言語
2. i. スンバワ語記述文法作成 ii. 文法記述の方法の研究 (AA 研共同研究プロジェクト) iii. バリ語教材開発と AA 研夏期言語研修の実施 iv. ウダヤナ大学所蔵バリ語ロントラ文書の転写, 分析, 翻訳 (科学研究費補助金)
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm>

陶安あんど (HAFNER, Arnd Helmut)

1. 中国法制史と法社会学
2. i. 旧中国固有の法理論の解明 (『中国の法理論—罪名学の試み』を出版する予定) ii. 中国法典形成史の構築 (文化論的な法理解に基づく法典編纂史再考. 科学研究費補助金) iii. 中国律学現存著作目録の編集 (中国社会科学院・法学研究所との共同プロジェクト) iv. 金文の初歩的研修

星泉 (HOSHI, Izumi)

1. チベット文化圏の言語学
2. i. チベット語辞典編纂 (GICAS : 特別推進研究(COE)) ii. 多言語処理技術の基盤整備 (新エネルギー・産業技術総合開発機構・産業技術研究助成) iii. チベット文字の画像データベース構築プロジェクト (GICAS : 特別推進研究(COE)) iv. 古典学のための多言語文書処理システムの開発 (科学研究費補助金) v. チベット語動詞研究
3. <http://www3.aa.tufs.ac.jp/~hoshi/index.html>

非常勤研究員

小田昌教 (ODA, Masanori)

1. 民族学・現代美術
2. アジア文字曼陀羅展」(AA 研), 「去年トリエンナーレで」展(横浜), 「都市文化を発信した 400 人展」(東京), 「KPO 15 周年記念展」(大阪)ほかの企画・制作・展示。『不幸の解読』の出版, 「図書新聞」の連載記事執筆, 美学校講師など。
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/mod/pri/modindex.html>

児玉茂昭 (KODAMA, Shigeaki)

1. 印欧語比較言語学
2. ギリシア語の名詞の互惠性の手法を, 特に語幹中性名詞に注目して分析し, 印欧語の名詞形成法について考察する。
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/staff/staff.html>

榮谷温子 (SAKAEDANI, Haruko)

1. アラビア語学
2. i. 現代の口語アラビア語 (主に) カイロ方言の聞き取り調査 ii. 『アラビア語カイロ方言と日本語の母音に関する対照研究』執筆 iii. カイロ方言基礎語彙集作成作業
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~harukos/>



ティッペー・ルドラ・スヴァーミ僧院本尊

カルナータカ州を中心に南インドで有力なヒンドゥー教宗派のひとつにヴィーラ・シャイヴァ派がある。同派の聖者で17・18世紀頃に活躍したと思われるティッペー＝ルドラ＝スヴァーミは数々の奇跡を行なったとされ、在所としていた僧院は、その死後、墓廟とされた。彼の肖像画の前面、ブランコに載せられているのはシヴァ神の象徴である男性器＝リングであり、地下には聖者の遺体が埋葬されているという。僧院は、ヒンドゥー教徒だけでなくイスラーム教徒も含む、王侯はじめ庶民に至る社会各層から広く信仰を集めて現在に至っている。

(1995年10月, インド, カルナータカ州チットラドゥルガ県ナーヤカナハッティ村にて, 太田信宏撮影)

運営諮問委員・専門委員

運営諮問委員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針など重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営諮問委員には所外の学識経験者など15名以内が委嘱されます。2001年4月～2003年3月の運営諮問委員は現在以下の通りです。

石井米雄	神田外語大学長 (京都大学名誉教授)	柴谷方良 長野泰彦	神戸大学教授 国立民族学博物館教授
大塚柳太郎	東京大学教授	原ひろ子	放送大学教授
川勝平太	国際日本文化研究センター教授	毛里和子	早稲田大学教授
古賀正則	一橋大学名誉教授	渡邊興亞	国立極地研究所長
坂村 健	東京大学教授		

専門委員

所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会があり、委員は所外の学識経験者のうちから委嘱されます。2002年度の委員は以下のとおりです。

研修委員会

大江孝男	東京外国語大学名誉教授	橋本 勝	大阪外国語大学教授
上村隆一	北九州市立大学教授	林 徹	東京大学教授
柴田紀男	天理大学教授	宮岡伯人	大阪学院大学教授
清水克正	名古屋学院大学教授	宮本正興	中部大学教授
在間 進	東京外国語大学教授 (同大副学長)	上岡弘二	東京外国語大学名誉教授

歳出

国立学校特別会計

(単位：千円)

区分	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
(項) 研究所	946,149	980,643	912,492	937,040
人件費	661,809	688,204	534,997	532,662
物件費	284,340	292,439	377,495	404,378
(項) 施設整備費	37,715			18,585
(項) 国立学校	4,637	6,941	7,482	9,560
(項) 産学連携等研究費	162	2,220	2,220	9,427
計	988,663	989,804	922,194	974,612

科学研究費補助金受入状況

(単位：千円)

区分	平成10年度		平成11年度		平成12年度		平成13年度	
	件数 (件)	金額	件数 (件)	金額	件数 (件)	金額	件数 (件)	金額
国際学術研究	6	59,900						
COE 形成基礎研究							1	90,000
基盤研究(A)			8	71,100	8	59,700	6	62,010
基盤研究(B)	1	1,000	2	11,000	1	4,700	1	3,500
基盤研究(C)	2	2,400	1	1,900	1	1,500	2	3,300
奨励研究(A)	2	1,900	3	3,400	3	2,900	1	800
特定領域研究(A)			1	1,400	4	7,000	6	11,200
計	11	65,200	15	88,800	17	75,800	17	170,810

奨学寄附金受入状況

(単位：千円)

区分	平成10年度		平成11年度		平成12年度		平成13年度	
	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額	件数(件)	金額
奨学寄附金	2	3,367	3	6,169	1	4,000	2	6,800

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(Information Resources Center / ILCAA, 略称 irc-ILCAA)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学术交流の推進を目的として、10年の時限で、平成9(1997)年度に設置されたものです。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをコンピュータ化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史的・民族的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。

3. 活動の指針

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、10年間で、下記の点で、理論・技術の整備・洗練をおこなうことをめざしています。

(a)アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備が緊要です。

(b)国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

(c)コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在での input methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系での input methods とインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

4. 今年度の主な研究事業

今年度もセンター運営費によるデータベース構築、言語文化に関する一次資料の資源化のためのプロジェクトが進行しています。その一例をあげると、『浅井文庫』台湾諸民族関連資料データベース構築(代表:豊島正之・三尾裕子)、「ビルマ地誌データベース構築」(代表:根本敬)などがあります。

この他に、以下のような本研究所で進行中の競争的研究費による研究活動、および外部団体との共同研究事業にも積極的に支援を行っています。

- (1)文部科学省・COE 形成基礎研究費『アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成』(代表：ペーリ・バースカララーオ)
- (2)文部科学省・データベース科研『三省堂言語学大辞典』(代表：町田和彦)
- (3)産学連携共同研究『多言語機械翻訳システムの評価研究』(共同研究クラス A, 代表：町田和彦)
- (4)新エネルギー・産業技術開発機構(NEDO)との共同研究『多言語処理技術の基盤整備』(代表：星泉)
- (5)国際情報化協力センター(CICC)との共同研究『イスラーム関連サイト収集プロジェクト』(代表：飯塚正人)

5. デジタル言語文化館

センターの研究活動の成果を世界に向けて発信するため、センターではインターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しました。この「デジタル言語文化館」は、単なるコンテンツの羅列ではなく、その加工技術・呈示技術とその背景の理論化自体もコンテンツとなる点が特徴であり、蒐集展示と、蒐集資料・技術の工具利用の両方がおこなえるところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を包含しつつ、それを越える点です。

コンテンツには「タロ芋データベース」「ヒンディー語形態素解析・辞書」「言語調査票」「カイロの肖像・19世紀」「ヒンディー語テキストコーパス」「チベット地図／人名・地名索引」など多数あります。今後も一層コンテンツを充実させていきますのでどうぞご期待ください。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主體的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果と言えましょう。

The screenshot displays two main sections of the website. The left section, titled 'हिंदू देवी देवता' (Hindu Deities), features an image of a Hindu deity and a list of deities including Trinity (三神一体), Shiva (シヴァ神), Kali (カーリー女神), Durga (ドゥルガー女神), Ganesh (ガネーシャ), Kamadhenu (カマデーヌ), and Vishnu (ヴィシュヌ神). The right section, titled 'ホシイズミ博士のチベット語研究室へようこそ' (Welcome to Professor Hoshizumi's Tibetan Language Research Room), includes a Tibetan song and a map of Indonesia for the 'インドネシア昔話の部屋' (Indonesian Folk Tales Room) section.

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約400点におよぶ出版物をはじめとして多様な研究成果をあげています。

また、1996年度からは、限られた予算のなかで、従来の研究分野を越えた斬新な共同研究を推進するため、新たに重点プロジェクトというカテゴリーが設けられました。最初の重点プロジェクトとして「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」が組織され、国際シンポジウムをおこなうなど、活発な研究活動が展開されてきました。1997年度には、さらに「音韻に関する通言語的研究」プロジェクトが、また2000年度からは「アジア・アフリカにおける政治文化の動態」が組織されました。

本年度おこなわれるプロジェクトは次のとおりです。

重点共同研究プロジェクト

音韻に関する通言語的研究

(主査：梶 茂樹／所員16、共同研究員46)

言語学の本来の研究分野は、音韻、形態、統語、意味であるが、そのなかでも音韻論は、長らく他の研究分野をリードしてきた。本研究プロジェクトは、音韻論のなかでも声調(tone)を中心とする超分節素(suprasegmentals)の研究をおこなう。

世界に、声調言語は意外と多い。中国語諸方言やチベット・ビルマ系諸語、またベトナム語、タイ語などの東南アジア諸語、バンツ系やクワ系などのニジェール・コンゴ諸語、マサイ語やナンディ語などのナイル系諸語、南部アフリカのコイ・サン諸語、またアフロ・アジア系の中でもチャディック諸語、さらにはニューカレドニア諸語やアメリカ・インディアン諸語など。また、日本語やインド・ヨーロッパ系のスウェーデン語やセルボ・クロアチア語などのピッチ・アクセント諸語の研究も重要である。

具体的な研究テーマとしては、声調、音調、アクセントなどの用語の整理と同時に、次のようなものと考えられる。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| (1)声調(正確にはピッチ)の音声学的特性 | (5)声調言語とアクセント言語との違い |
| (2)子音、母音といった分節素との関係 | (6)世界の声調言語のタイプロジー |
| (3)個々の言語における声調の体系 | (7)声調の通時的変化と比較研究 |
| (4)声調の語彙的、文法的機能 | (8)声調の発生と消滅 |

鮎澤孝子	生駒美喜	市田泰弘	伊藤英人	岩田 礼
上田広美	上野善道	遠藤光暁	大江孝男	岡崎正男
加藤昌彦	角谷征昭	上岡弘二	神谷俊郎	木部暢子
久保智之	窪菌晴夫	熊本 裕	坂本恭章	品川大輔
清水克正	清水政明	鈴木玲子	田中伸一	壇辻正剛
角田太作	中井幸比古	中嶋幹起	中西裕樹	中野暁雄
長尾美武	長野泰彦	林 徹	早田輝洋	原口庄輔
平山久雄	福井 玲	堀 博文	前田 洋	松村一登
松森晶子	箕浦信勝	藪 司郎	湯川恭敏	米田信子
SMITH, Donna M Erickson				

21世紀を目前に控えた今日、地球社会は「グローバル化」を求める言説に席卷されている観がある。規制緩和と公正な市場競争によって個人の努力が正当に報われる社会を実現しようという主張である。だが現実には、競争から脱落する不幸な人々の群れが目につく一方、グローバル化の先にかなる未来が待っているのか、明確なヴィジョンを誰も示し得ずにいる。内外を問わず、ある種の閉塞感が蔓延するゆえんである。

本プロジェクトは、このような閉塞感を打破すべく、アジア・アフリカの政治文化に焦点を当てる。アジア・アフリカはすでに19世紀から植民地化という名の、西欧的体系への規格化・標準化を経験しており、現在進行中のグローバル化に対しても適合と反発、両方の対応を見せている。すなわち、本プロジェクトの目的は、アジア・アフリカの様々な政治文化を多角的に調査・研究することを通じて、一般に流布しているグローバル化の言説を相対化し、地球社会の文化創造のための新たなパラダイムを提示することにある。

この目的を達成するため、本プロジェクトでは6つのサブグループを設置する。(「近代国家機構の形成」「ナショナリズムとインターナショナリズム」「多民族統合メカニズムの比較」「言語共同体と言語政策」「移動と越境」「国家・宗教・市民社会」)。これにより、アジア・アフリカにおける多様な政治文化の成立過程を明らかにし、国家を軸とする画一性と多様性との拮抗関係を探り、国家の枠に収まらない様々な動きや組織の現状を捉えることができると考える。

陳 天璽	赤嶺 淳	栗屋利江	李 妍淑	井坂理穂
石川 登	伊藤 眞	上杉富之	遠藤 貢	王 柳蘭
大石高志	大林 稔	落合雄彦	粕谷 元	勝俣 誠
桐山 昇	楠瀬佳子	栗本英世	高 榮珍	小泉真理
小杉 泰	近藤光博	佐藤 章	佐原徹哉	嶋田義仁
清水 展	菅原由美	鈴木 茂	砂野幸稔	芹澤知広
武内進一	竹沢尚一郎	竹村景子	田中雅一	田村慶子
津田みわ	富沢寿勇	内藤雅雄	長津一史	西村俊一
子島 進	信田敏宏	濱元聡子	林 行夫	速水洋子
馬場 孝	稗田 乃	牧野久美子	松田素二	溝上富夫
宮本正興	宮脇幸生	村田奈々子	森 孝一	山下晋司
山本博之	吉國恒雄	吉澤誠一郎	吉田憲司	和崎春日
モアペ・フェンソン・アラム				



シュウエダゴン・パゴダ南参道の売店

ビルマ仏教徒の誇りであるシュウエダゴン・パゴダは、ヤンゴン市街地の北約1.5km離れた丘の上にある。写真はシュウエダゴンの表玄関とも言ふべき南門からパゴダに向かう参道の側に並ぶ土産物屋である。

(2002年1月、ミャンマー連邦ヤンゴン、シュウエダゴン・パゴダにて、澤田英夫撮影)

一般共同研究プロジェクト

旅と表象の比較研究（第2期）

（主査：高知尾 仁／所員5，共同研究員12）

この研究は、他者との出会いを提示し、他者の言表と他者世界が表象するものを解釈し、他者文化の持つ多様な意味を構成する旅のディスクールを主要な対象とする。その際、他者言説を生むコンテクストや、他者の自己（自己文化）との距離・差異の構築や、他者表象が持つ価値評価などが問題となると思われる。他者が直接的に語られるという前提への疑問と、他者表象のバイアスと他者についてのディスクールそれ自体が充分に見つめられなかったことへの反省として、近年欧米で飛躍的に研究が進められている旅行記研究に対応して、ここでは、近代ヨーロッパ（ルネサンス以降）の旅のテキストとそのほかの文化の旅のテキストを取り上げるとともに、他者についての多種多様な表象形態や、それに関連した諸理念（例えば、秩序、正義、正統、コスモス）の表象化についても研究の対象とする。従って、この研究では、旅論・表象論・他者論とそれらの交差する領域が取り扱われることとなる。このような比較研究によって、エクリチュールを有する文化による、他者と他者のいる場所と時間の配置・配列が明らかにされ、またその文化と他者との関係性（例えば、理想、調和、幻想、混乱、絶望、排除）を提示するディスクールが明らかにされるものと期待される。またさらには、他者に対比された自己（自己文化）のアイデンティティの提示の実体や、文化の普遍性や近代というディスクールについても考察されることが期待される。

第1期の研究に継続して、第2期では、「旅の研究」を「人文主義・人文科学における現地(field)主義の系譜学的研究」へと展開し、「他者表象の研究」を「世界表象のモーメントとしての両（東西）インド表象の研究」へと展開する予定である。

浅井雅志	荒木正純	彌永信美	齋藤 晃	重松伸司
田中純男	谷口智子	難波美和子	西尾哲夫	原 毅彦
原田健一	渡辺公三			

東アジアの社会変容と国際環境

（主査：中見立夫／所員3，共同研究員33）

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに、現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。

また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

赤嶺 守	石井 明	石濱裕美子	井上 治	井村哲郎
江夏由樹	岡 洋樹	岡本隆司	尾形洋一	小野和子
笠原十九司	加藤直人	貴志俊彦	岸本美緒	楠木賢道
佐々木揚	新免 康	菅原 純	坪井善明	寺山恭輔
中村 義	西村成雄	萩原 守	浜下武志	原 暉之
藤井昇三	細谷良夫	松重充浩	毛里和子	森川哲雄
森山茂徳	柳澤 明	吉澤誠一郎		

西南中国非漢族の歴史に関する総合的研究

(主査：クリスチャン・ダニエルス／所員5，共同研究員17)

現在の西南中国は、もともと非漢族の居住地域であり、中国歴代王朝の支配下に少しずつ組み込まれていく歴史をもつ地域である。元明清を通じて、漢民族移民の増大と歴代王朝の統治政策によって、多くの非漢族が中央政府に直接支配されるようになり、そのことによって民族移動が激しくなり、非漢族の土着社会に大きな変容がおこり、東南アジア大陸部へ移住する非漢族も出現した。だが、従来この歴史過程を総合的に分析する研究は僅少であった。

本プロジェクトの目的は、(1)西南中国非漢族の歴史に関する研究発表、(2)史(資)料の発掘・収集・整理をおこなうことによって、従来注目されることのなかったこの地域の歴史に対する研究を促進することにある。なお、方法論として非漢族を主体とした分析視点を重視すると同時に、歴史学者以外に文化人類学、民族学、民俗学、言語学などの専門家の参加によって学際的なアプローチの構築をめざす。

なお、本研究所の「歴史・民族叢書」では、『雲南少数民族伝統生産工具図録』、『四川の考古と民俗』及び『西南中国伝統生産工具図録』を刊行している。

井上 徹	上田 信	上西泰之	菊池秀明	岸本美緒
末成道男	武内房司	多田狷介	谷口房男	張 士 陽
塚田誠之	寺田浩明	林謙一郎	吉澤誠一郎	吉野 晃
渡辺佳成	渡部 武			

アル＝アフガーニーとイスラームの「近代」 (主査：飯塚正人／所員2，共同研究員22)

イラン生まれのジャマール・アッディーン・アル＝アフガーニー(1897年没)は、生涯にアフガニスタン、インド、エジプト、トルコといったイスラーム圏の各地とヨーロッパ諸国を訪れ、19世紀後半以降のイスラーム世界の歴史に大きな思想的影響を与えた革命家である。彼は伝統的イスラーム思想の改革や専制政治の打破など、ムスリム社会内部における変革の必要を唱える一方、各地でヨーロッパの侵出に対するムスリムの団結(パン＝イスラミズム)を説いて回った。エジプトのオラービー運動、イランのタバコ・ボイコット運動など、19世紀末に各地で起きた「民族」運動も、彼の存在を抜きにして語ることはできないし、現在イスラーム世界が直面している思想的課題のほとんどはアル＝アフガーニーのもとですでに予感されていたといっても過言ではない。

本プロジェクトは、1997年に没後100年を迎えたこの偉大な革命家の思想や足跡、各地における評価などを総合的に分析することによって、最終的にはイスラーム世界における「近代」の意味まで問い直すことをめざす。また、これと並行して、アル＝アフガーニーが弟子のムハンマド・アブドゥフとともに、1884年にパリで創刊した雑誌『固き絆』の邦訳も進めていく予定である。

新井政美	池内 恵	大石高志	大塚和夫	帯谷知可
加賀谷寛	粕谷 元	栗田禎子	小杉 泰	小松久男
酒井啓子	澤江史子	嶋尾孔仁子	富田健次	中田 考
中西久枝	中村 覚	八尾師誠	松永泰行	松本 弘
三木 亘	吉村慎太郎			

紀元前数世紀に現れ8世紀から確固たるものとなり、インド亜大陸を挟んで東アフリカからアラビア地域と東南アジア地域とを結ぶ交易や移住や巡礼による人と物との移動が生み出した文化・社会的に多元的でありかつ歴史的に重層的なネットワークこそが、インド洋海域世界である。この海域世界は、16世紀以降のヨーロッパ世界のインド洋への進出とそれに伴う近代世界システムの確立によって破壊されるどころか、それがもたらした植民地化や奴隷制や契約移民制は新たな人々の出会いを促進し流動性を高めまた居住地域を拡大した結果、その多元性と重層性をより一層複雑化させると共に動的な性格を加速することとなった。それゆえ、インド洋においては、ブローデルの『地中海』やA. リードの『交易時代の東南アジア』に示された包括的かつ微視的な歴史学の視点がとりわけ有効性を持つものである。

本プロジェクトにおいては、個別文化・社会の研究の成果をインド洋海域世界の歴史的成立とその展開の通事的研究に導き入れることおよびその通事的視点を共時的な個別文化・社会研究に導き入れることにより相互の研究を深化させることの可能性を、歴史学・言語学・人類学はもとより考古学・技術史・栽培植物学などの学際的視点から討議を重ねてゆくことを目標として措定している。さらに、多元的かつ重層的に形成・展開されてきたインド洋海域世界についての考察は、局所的な地域研究に寄与するのみならずグローバル化する現代世界の中における多元・多文化的な人の在り方に対し具体的なモデルを提示することあるいは国民国家・領域国家とは異なる組織のモデルを提示することをも招来するものである。

本プロジェクトの成果は、フィールドワークに基づいたインド洋海域世界の個別文化・社会についての記述的なモノグラフおよびインド洋海域世界像に迫る論考集あるいは画像集として公開していく予定である。

秋道智彌	飯田 卓	飯田優美	川床睦夫	崎山 理
杉本星子	高桑史子	田中耕司	富永智津子	花淵馨也
堀内 孝	松浦 章	森山 工	門田 修	家島彦一

アジア・アフリカにおけるジェンダーとセクシュアリティ

(主査：内堀基光／所員6，共同研究員10)

人類社会における性と性差の問題へのアプローチに関しては、ジェンダーとセクシュアリティという2つの用語で代表される関心のあり方の差異がある。この共同研究では、広くアジアとアフリカの諸社会を見渡しつつ、ジェンダーとセクシュアリティの社会的編制や性的イメージの構成について、国家、地域的および家内の経済といったマクロな規制とミクロな対面行動の架け橋、あるいはバトルフィールドとなる議論を展開し、これまでの人類学的研究から歩を進める。平成14年度は、欲望の形成と統御を中心に検討し、セクシュアリティの領域にとどまらない欲望論の展望を開く。

伊藤 眞	栗田博之	黒田末寿	小泉順子	菅原和孝
田辺明生	中川 敏	速水洋子	松園萬亀雄	牟田和恵

社会空間と変容する宗教

(主査：西井涼子／所員 9, 共同研究員 14)

人類学においては個人対社会、主観対客観といった二項対立的な問題設定を前提としていることが多い。この共同研究プロジェクトは、こうした前提を超えて、いかに人々の経験のリアリティを捉えることができるのかについての、人類学的な理論的展望をひらくことを目的とする。ここでいう社会空間とは、主体の実践のスペース、もしくは実践において他者と相互作用しつつ構築する社会関係の総体をさす。そこにおいては、実践主体はいかに重層する諸関係とかかわりながら自己を維持し構成するのかが問題となる。そこからあらためて、社会的なるものが問われることになる。このような社会科学の中心的ともいえる課題を追求するために、研究会は人類学者を中心としながらも、心理学、社会思想等の隣接分野の研究者の参加をあおぎ、学際的な共同作業による理論の構築をめざす。

本プロジェクトでは、こうした課題を追求するにあたり、宗教といった現象に焦点をあわせることで、個々のメンバーの事例報告の羅列に終わることを避け、より議論を建設的に深めようとする意図をもっている。高度経済成長に伴う大衆消費社会の出現、情報社会化、国際化のなかで、人々は宗教的な実践を多様化、差異化させている。このような宗教、あるいは宗教的なものの経験をとおして、再編成されていく社会関係のあり方を考察することは、社会空間の概念を歴史的な文脈において検討することを可能にするものと思われる。

青木恵理子	今村仁司	高木光太郎	高崎 恵	田中雅一
田邊繁治	田村愛理	土佐桂子	當眞千賀子	名和克郎
平井京之介	本田 洋	箭内 匡	矢野秀武	

日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究

(主査：根本 敬／所員 2, 共同研究員 7)

本プロジェクトは、日本占領期のビルマ(1942-45年)に関する歴史を、政治・経済・軍事・農業・文化・民衆動向・少数民族・従軍慰安婦の諸角度から実証的な検証を加え、総合的に理解することを目的としている。その際、占領されたビルマ側に重点を置きつつ、占領した日本側の意図と占領政策の実態についても十分に注目するつもりである。

トヨタ財団の計画助成を受けながら、国内およびビルマでの聞き取り調査の実施、文献資料の在り処の確認と調査・整理、研究会を通じての相互の情報交換、最終年度(3年度目)における国内シンポジウムの開催などを予定している。プロジェクト終了後には成果刊行物として、資料集と論文集をそれぞれ発行する計画である。

池田一人	伊野憲治	岩城高広	高橋昭雄	武島良成
南田みどり	森川万智子			

古典修辞学の諸部門の中で 19 世紀まで存続したのは「表現法(elocutio)」のみであるが、20 世紀半ばから始まった修辞学の復権は表現法を、テキストを構成する諸要素間の範列的關係及び連辭的關係におけるコード変換の技法として、実体的な要素単位に対して直接作用する操作であると見なすに至っている。

本プロジェクトは言語表現、音楽表現、映像表現等の作り手、またそれらの表現を様々な手法を用いて分析している研究者を共同研究員に加え、芸術の美的価値をある構造の関数として記述するという、一元的な芸術＝形式論に基づく「形式的構造の研究」としての一般修辞学を情報学的に考察することによって、様々な形式を持つ言語文化情報に偏在する修辞学的技法のレパートリーを明らかにすることを目的とする。

2001 年度は、身体、物語、映像、音楽等のテキスト分析における修辞学の関与可能性について一連の報告を行ったが、2002 年度は、修辞学そのものに内在する汎用的な技法を個別的に検証すると共に、より多様な形態のテキストを修辞学的に扱った報告を行う予定である。

青柳悦子	石井 満	宇佐美隆憲	小方 孝	往住彰文
金井明人	上村龍太郎	佐藤みどり	永崎研宣	永野光浩
西尾哲夫	平井 覚	堀内正樹	松本みどり	水野信男
良峯徳和				

間大西洋アフリカ系諸社会における 20 世紀〈個体形成〉の比較研究

(主査：真島一郎／所員 4, 共同研究員 26)

21 世紀転換期の人文社会系諸学でこれまでに発現をみてきたさまざまな思潮の底流にあるのは、西欧近代の市民原理に裏打ちされ相互に交錯しつつ成立した三様のレヴェルにおける歴史主体－〈国家〉〈民族〉〈個人〉－のありようを複数の視角から根本的に問いなおしていく、主体の問いなおし作業にほかならなかった。本プロジェクトがめざすのは、このうち国家や民族の“揺らぎ”とは対照的に主体としての権利づけが複数性のうちでつねに代補・更新されつつ、非西洋世界における記憶、声、身体、ジェンダー、あるいはクレオール、ディアスポラ、サパルタン、マイノリティ、市民（市民社会、世界市民…）といった数々の言説空間の内中で中核を占めてきた第三の主体概念〈個人〉の位置づけについて、20 世紀・間大西洋アフリカ系諸社会における特定の個々人の生の深みにまでさかのぼった具体の場からこれを問いなおし、比較検討していく作業である。アフリカ大陸・島嶼部の諸社会、カリブ・中南米のアフロ系諸社会、およびアメリカ合州国のアフリカ系コミュニティを対象とする人類学、歴史学、政治学、文学など多分野の研究者から構成された共同研究によりその際とくに焦点が当てられるのは、自己による自己の生を通じた表象形成と、他者による他者の情報を介した表象形成との交叉点で成立する、〈個体化＝個体形成 individualization〉の歴史・文化的動態となるだろう。

阿部小涼	荒井芳廣	岩田晋典	遠藤 貢	大辻千恵子
大森一輝	落合雄彦	北川勝彦	工藤多香子	栗本英世
崎山政毅	佐々木孝弘	柴田佳子	鈴木 茂	鈴木慎一郎
武内進一	竹中興慈	中條 献	津田みわ	中林伸浩
浜 邦彦	樋口映美	星埜守之	松田素二	矢澤達宏
渡辺公三				

個別言語の文法構造の記述は、良くも悪くも「客観的事実の前理論的列記」と考えられることがある。そのために、記述に携わるものも、またその記述を形式理論構築に活用するものも、当の記述の理論的含みに対して無反省、無批判である場合が多い。しかし実際には、「記述」という作業は高度に理論的な考察、決断の積み重ねであり、そうしてまとめられた文法は理論的に中立な事実の羅列ではありえない。とすれば、対象言語の本質を真に捉えた記述の枠組み、分析の単位、用いられる基本概念などを注意深く検討、規定する課程を通らずには達成しえない。そこで、このプロジェクトでは、文法記述に携わっている研究者が集まり、文法記述に際してさまざまなレベルでなされなければならない理論的考察および決断の数々を意識的に見据え、検討していく。

プロジェクトは、研究会での討論を中心に進めていくが、メンバー各自がそれぞれ実際に文法の執筆を進めつつ、文法記述のあり方、問題点、難点などを洗い出し、討論していく。

加藤昌彦

中国の律学は、後漢から唐代初期にかけて隆盛を極め、法律の伝承及び漸次的な体系化を通じて、法典の形成に寄与した。その影響は、法典の編纂と施行という国家の一時的な権力介入よりも大きいように思われる。というのは、国家の論理では、確かに法典は主権者の命令によって始めて効力を賦与され、編纂過程において一時的に学者の手を借りるにしても、主導権は国家が握り、法典の施行も主権者の名義においてなされる。しかし、長期的な歴史過程から判断すれば、国家の編纂活動はまれに行われる突発的な出来事に過ぎない。その存在は、果てしない太平洋に浮かぶ小さな島々に喩えられよう。その間の橋渡しは、法律資料の蒐集、保存ないし整理活動によってなされるが、唐代以前の中国の国家はまだ自前の文書行政によってこの機能を果たすことができなかつた。法典編纂という突発的な出来事から遡って、そこに駆り出される学者の系譜や彼らが所有している法律資料の来歴を調べてみると、律学が、各王朝による散発的な法典編纂をつなぐ生命線となっているように思われる。

本研究プロジェクトは、「律学」を「律」と「学」とに分けて、当時の法律、ひいては国家との関わり方と、学問体系における律学の位置という二つの方面から、律学に肉薄しようとする。前者については、官僚機構における律学者の位置と、律学者間における法律資料ないし法的知識の伝承の仕方を分析する。これは主として正史に基づく律学者の学問的系譜と官僚としての経歴の検討、および一般的な官僚経歴との比較検討によって遂行される。後者については、経学と小学（文字学）における今古文論争の推移を手掛かりに、学問体系の大きな地殻変動に即して律学の変遷を追跡する。古代の経学、小学と律学は、先王や歴史の権威、もしくは国家権力によって所与として与えられた材料に依拠しつつも、実際は、断片的な材料を輯佚して知の体系化を図ることを通じて始めて、経典、字典と法典を創出している。この共通点に着目して、法典の非国家的な形成を解明しようとする。

石岡 浩

本プロジェクトは、アフリカ大陸を、サハラ以北・以南，東アフリカ・西アフリカ等のように分断することなくとらえ，種々の語族，国家，民族とかかわるアフリカの諸言語を，広い視野から分析・考察していくことを目的とする。

現地調査に基づく，地道ながらもオリジナルな研究を主流としつつ，文献・資料に基づく緻密な考察をも加え，さまざまな歴史・文化の交錯するアフリカの言語の実情を，多彩な研究者の間で共有し，明らかにしていきたい。

具体的な活動計画：

- 1) 年間3乃至4回の研究会を開き，2～3名による口頭発表およびそれに基づく討論を行う。
- 2) 研究会の成果は，発表者による，AA研 Journal 等への投稿を要請する等，紙媒体での公表はもちろんのこと，本プロジェクトのウェブサイトを整備し，すみやかにウェブ上で公開していく。
- 3) 本プロジェクトのウェブサイトでは，研究会で口頭発表されたものでなくとも，アフリカの言語研究に関する論文や書評等を積極的に受理・公開する。
- 4) その他，共同研究員等から寄せられた，アフリカ言語学やそれに関連する学会等の情報を，ウェブサイトにおいて告知していく。
- 5) ウェブサイトと並行して，メーリング・リストによる迅速な情報交換を行なう。
- 6) ときには，在日アフリカ人等を交えた懇親の場を設け，広い意味での異文化交流も図っていきたいと考えている。

小森淳子	榮谷温子	佐藤道雄	塩田勝彦	砂野幸稔
竹村景子	柘植洋一	中野暁雄	中村博一	日野舜也
宮本律子	米田信子	Philips, John Edward		
Ratcliffe, Robert R.				

土地・自然資源をめぐる認識・実践・表象過程(主査：河合香史／所員5，共同研究員5)

本研究プロジェクトは，アジア・アフリカの諸社会において土地や自然資源をめぐる現在進行しつつある状況を，利用や所有にかんする形態や制度論にとどまることなく，生活のさまざまな文脈において生起する人びとの具体的な実践から，その生活世界を統合的に把握することによって解析するものである。

土地は，名づけられ，語られ，歴史を付与されたものであるとともに，生活実践の場として，そこに身をおき，身体をもって働きかける，あるいは見，聞き，ふれることによって身体において「知る」対象であるといった意味において，身体性とも深くかかわる。こうした土地，およびこれに付随する自然資源は，外在的な認識の対象にとどまらず，人びとにとって「生きられる世界の全体」としてあつかいうる。このような視点を採用することによって，土地や自然資源をめぐる認識・実践・表象という問題系を，実用主義と主知主義，実体論と象徴論の二項対立的な図式をこえて，身体，記憶，歴史，他者といった要素を取りこみながら「生」の全体を包括した文化・社会理論を構築するための方法論と解析手法として提示することが可能となる。

本プロジェクトでは，土地・自然資源の利用や領有の実態，および認識と表象過程についておのおのの社会のおかれた状況をふまえて比較検討する。さらに，土地や自然資源をめぐる人びとの多彩な実践を，具体的な「生」の現場としての土地をめぐる自然観・環境認識の問題系としてあつかい，民族の歴史や集団間関係，国家政策との関係をふくめた「生」の現場から再考察することを目指す。

各年次とも，3～4回の共同研究会を開催する予定である。

梅崎昌裕	北村光二	小松かおり	杉山祐子	寺嶋秀明
------	------	-------	------	------

現代の言語理論は、西欧諸語の研究に深く根ざしたものを中心に展開されてきた。西欧語型の言語理論の枠組みが多く、非ヨーロッパ的言語の理論的考察に広く適用されていく中で、言語構造のタイプの違いからくる分析上の問題点は多く指摘されてきたが、これまでは、結局、従来理論の完成度の問題として対処され、西欧語型理論が基礎をおく前提概念、カテゴリーに対して具体的な反省が及ぶことはなかった。また、記述言語学者の側も、個々の言語記述において、そのような伝統的前提概念やカテゴリーを、十分に反省を加えることなく、基本的枠組みとして踏襲することが決して少なくなく、その結果、それぞれの言語の特徴に即した記述であるべきものが、はからずも「西欧語から見た記述」になってしまっていることも多い。

本プロジェクトでは、従来の言語理論、言語記述のあり方を問い直し、言語研究の新しい展開のための基盤を作ることを目的とする。そのために、現行および過去の言語理論について、その基礎概念、カテゴリーを再検討し、通言語的視野に立った枠組みの可能性を検討する。

加藤重広

佐久間淳一

町田 健

初山洋介



水カマニ車

マニ車はチベット仏教の仏具。回転する円筒の中に経文が入っていて、1回まわすとその経文を1回読んだことになるというものである。片手で持てるほどの小さいものから、寺院の入口や壁際に据えられた大型のものまで様々あり、手で回すもののほか風力や水力で回るものもある。写真のマニ車はヤルツェンボ川から引き込んだ水の力で回るもので、手前の溝の中で水車がしぶきを上げていた。

(2002年3月、中華人民共和国チベット自治区ラサ、ノル布林カにて、澤田英夫撮影)

所外からの代表による共同研究プロジェクト

浅井・小川未整理資料の分類・整理・研究（主査：土田 滋／所員3，共同研究員7）

アジア・アフリカ言語文化研究所には、1970年に浅井恵倫博士の所蔵していた書籍を中心として、浅井文庫が設置された。しかし、既に公開された書籍の他に、台湾原住民に関する貴重な一次資料（フィールドノート、語彙集等、写真などのアルバムやフィルム、原稿、書簡、単語カード、音声資料、8ミリフィルム、未発表の高砂族伝説集検索カード、浅井の大先輩でもある小川尚義の講義ノート等）があり、そのほとんどは未整理・未公開である。これらの中には、戦災で現物が消失した『スピリツアル修行』のマニラ本のフィルムや台湾の平埔族関係の清代に作られた土地契約文書の原本なども含まれており、これらは、現在では既に入ることがほとんど不可能である。また、台湾の原住民のうち、平埔族については、既に平埔族自体が漢化してしまっており、独自の言語、文化のほとんどを失っている。このような事実から考えれば、浅井博士の残した資料は大変重要な資料であるということが出来、早急に分類・整理を行って公開することが必要と考えられる。

このような状況に鑑み、本プロジェクトは以下の2点を主な目的とする。1つめは、浅井博士及び小川尚義博士の残した一次資料の整理・分類を行い、この方面の研究者の研究の利便を図るために、電子媒体を中心として公開していくことである。本資料に関しては、台湾の研究者からも関心を寄せられており、その学術的な価値は非常に高い。第2には、両博士の資料を通して、戦前の日本人による言語学・民族学の調査活動が主に学術的な面において果たした役割などについての検討を行うことである。これまで、鳥居龍蔵、伊能嘉矩等一部の学者については、いくつかの一次資料が整理されて公開されているが、当時の植民地政策の中での、日本人による言語学あるいは民族学的な調査活動のコンセプトや実態などについては、まだまだ研究が進んでいるとは言い難い。本プロジェクトは、浅井博士の資料の整理・分類を通して、日本植民地時代の台湾の民族学・言語学の調査活動についての一側面を明らかにすることができると考えられる。尚、本研究の成果に関しては、<http://jcs.aa.tufs.ac.jp/Asai/>を参照されたい。

笠原政治
森口恒一

清水 純
吉澤誠一郎

末成道男

谷 智子

中西裕二

短期共同研究員（公募）

本研究所は、アジア・アフリカ地域にかかわる言語文化の総合的研究のため設立された全国共同利用研究所です。その研究事業の一環として、1978（昭和53）年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（1週間以上3カ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。主としてアジア・アフリカ地域に関する人文・社会科学を専攻する研究者を対象とした短期共同研究員は、各自の研究課題にもとづき本研究所に短期滞在し、本研究所教官と共同で研究を行います。

国際シンポジウム

共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所は、文部科学省「中核的研究機関支援プログラム」(平成7年度から13年度まで)により「卓越した研究拠点」(COE: Center of Excellence)に指定されて以降、学術研究の情報化、国際化にこれまで以上重点をおいた事業を展開しています。

国際化の面では、「国際シンポジウム経費」によって、国内外の先端的な研究を行っている研究者を招聘し、国際シンポジウムを開催しています。本研究所が日本における人文社会科学の分野で先導的な研究を推進していく上で、国際的な学術交流は、今後ますます重要な活動となっていくことは間違いありません。

これまでに開催されたシンポジウム、及び平成14年度に予定されているシンポジウムは以下のとおりです。

シンポジウム名	開催期間	参加者
東南アジアにおける人の移動と文化の創造	1996. 12/ 3～ 5	国内 45 名 国外 12 名
音韻の通言語的研究	1998. 12/10～12	国内 45 名 国外 16 名
南アジアにおける言語接触と収束的発達	1999. 12/ 6～ 9	国内 43 名 国外 17 名
音韻の通言語的研究～音調の発生、日本語のアクセント及び関連研究	2000. 12/12～14	国内 73 名 国外 24 名
非主格の「主語」をめぐって	2001. 12/18～21	国内 95 名 国外 29 名
(予定) 音調の通言語的研究	2002. 12/17～21	国内 47 名 国外 28 名



外国人研究者招へい

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招へい計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。この4年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

(※は COE 外国人研究員, ※は客員以外の研究員)

1999	※Kenneth William Cook	アメリカ合衆国	認知及び応用言語学
	※John Gongwe Kiango	タンザニア	語彙学, 辞書編纂学
	* Didier Louis Nadia Goyvaerts	ベルギー	言語学
	Traoré Mory	コートジボワール	実践演劇論, 芸術社会学
	清格爾泰	中国	言語学 (契丹語研究)
	Stanley Herman Starosta	アメリカ合衆国	言語学
	Peter Edwin Hook	アメリカ合衆国	印欧言語学, 言語類型学
	Tej Krishan Bhatia	アメリカ合衆国	言語学
	※Andrew R. Hall	アメリカ合衆国	東アジア史
	※Bolombo Isalokembya	コンゴ	社会心理学
	2000	* Ernst Frederick Kotzé	南アフリカ
Diouf Jean Léopold		セネガル	ウォロフ語
Ileto Reynaldo Clemeña		フィリピン	東南アジア史
Subbarao Karumuri Venkata		インド	言語学
Zhukova Alevtina Nikodimovna		ロシア	チュクチ語
Breen James William		オーストラリア	計算機辞書学
※Chawla Ashok Kumar		インド	言語学
2001		* Kansakar Tej Ratna	ネパール
	※Syrtypova Surun-Khanda Damshinimayaevna	ロシア	チベット学
	※Christopher I. Beckwith	アメリカ合衆国	東北アジア・中央ユーラシア研究
	※Ricardo T. Jose	フィリピン	歴史学
	※Ram Dayal Munda	インド	言語学
	※陳 慈玉	台湾	経済史
	Jose Lydia Yu	フィリピン	政治学
	Hassan Hassan Bakr	エジプト・アラブ共和国	政治学
	Wufela André Yaek'olingo	コンゴ	口承文芸学
	Horstmann Alexander Klaus	ドイツ	東南アジア開発社会学
	Menski, Werner Friedhelm	ドイツ	南アジアの法
2002	※JOYCE, Terry Andrew	イギリス	心理学
	※HANJABAM, Surmangol Sharma	インド	言語学
	※OEHLER, Susan Elizabeth	アメリカ合衆国	民俗音楽・民族学
	Sutjaja, I Gusti Made	インドネシア	言語学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下のとおりです。

(外国機関名(略号) / 締結年 / 国名)

国立科学技術研究機構 (ONAREST) (現・高等教育・情報科学・科学研究省 (MESIRES))

1978. カメルーン

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(1969-76)におけるカメルーンとの共同研究を経て、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所長を招へい、本研究所で協定締結(1978)。所員の現地における共同研究(1980-81, 82, 84, 86): カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91): 本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行, 単行本 8 冊(African Languages and Ethnography シリーズ), 論文 1 点(*Sudan Sahel Studies* 所収)。

インド諸語中央研究所 (CIIL) 1987. インド

CIIL 所長本研究所訪問(1983), 副所長来訪(1985), 所員来所, 共同研究(1984-85, 1991-92): 本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92): 共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施, 共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。

インド統計研究所 (ISI) 1987. インド

ISI 特別客員研究員本研究所来所, 共同研究(1985-86), 経済研究部長来訪(1988): 本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91): 共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987-): 電算資料シリーズ 3 冊発行(1987, 88, 90)。

チベット言語文化研究所 (LCAT) 1988. フランス

敦煌の古代チベット語文献のデータベース化を行なっているが, その一部の KWIC 索引は, *Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique* として, フランス国立図書館から 1990 年に出版された。

人文科学研究所 (ISH) 1988. マリ

文部科学省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を *Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires*, Vol.1.(1988), Vol.2.(1990), Vol.3.(1992)として刊行した。

農業計画・経済研究センター (CAPES) 1996. イラン

国際学術研究「イスラム圏における人間移動と共生システムに関する調査研究」の実施を契機に、将来幅広くイラン文化と日本文化に関する共同研究プロジェクトを組織する目的で研究協力協定が締結された。両研究機関の共同研究員に、研究員と同等の便宜と援助をおこなうことになっている。

情報文化省文化研究所 (IRC) 1997. ラオス

「シャン文化圏」プロジェクトを円滑に進めるため、ラオスとの共同研究を目的として学術協力協定が締結された。

インドネシア科学院社会文化研究センター (PMB-LIPI) 2000. インドネシア

インドネシアの研究者との共同研究、セミナー、研究交流などの推進をはかるため、学術交流に関する申し合わせ。この申し合わせに基づき、2000年度より、国際学術研究「ボルネオとその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究」による共同研究、研究セミナー、研究者の交流を実施している。

海外学術調査総括班

科学研究費補助金（以下「科研費」という）を受けている「総括班」は、本研究所石井溥教授を代表者とし、他のさまざまな機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局をおいて、科研費にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と日本学術振興会との間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。

活動の主なものとしては、科研費で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニュースレター』の広報などがあります。(http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/index-j.html)

図書資料コレクション

日本における唯一の、大学附置人文科学系共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を、1964（昭和 39）年の創設以来収集してきました。とくに海外約 50 カ国、150 研究機関とのあいだで、寄贈・交換により資料を継続的に集めています。現在、その総数は、図書 10 万冊弱、雑誌約 1,220 タイトル、マイクロフィルム 1 万余リール、マイクロフィッシュ 3 千余に達していますが、このほかにも古文書、地図、写真、ビデオや、さらには CD-ROM などのあらたな媒体もふくまれています。

このなかには、浅井恵倫氏旧蔵資料（台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート、参考文献類）のように、本研究所プロジェクトにより整理され、研究所ホームページで公開され、内外研究者の関心を集めているものもあります。またカンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、かの地の文化復興に貢献しました。さらに 19 世紀「カイロ石版画集」コレクションは、先年、中近東文化センターにおいて展覧会が開催され、注目を浴びました。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第 2 版」、19 世紀末からのイランの主要新聞 65 種、19 世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、清代公文書各種など、貴重な文献がふくまれています。三浦周行氏旧蔵品もふくむ、朝鮮王朝古文書類コレクションは、最近入手されたものですが、現在も収集が続けられております。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫では、山本謙吾（満洲語研究）、浅井恵倫（オーストロネシア語研究）、小林高四郎（モンゴル史研究）、前嶋信次（イスラーム研究）、王育徳（台湾語・文化研究）諸氏の蔵書が保管されています。

今回の移転にともない、これらのコレクションのうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館内に設置された AA 研コーナーに別置配架され、貴重書、参考図書、大型本、マイクロフィルム類、雑誌は研究所棟の 1 階にある文献資料室で閲覧できます。なお附属図書館 AA 研コーナーにある図書は、ほかの附属図書館蔵書とともに、共同研究員、研究生も館外貸出しのサービスをうけられます。

国立国会図書館のアジア関係図書は、関西館新設にともない移転しますが、その意味では、東洋文庫と並んで、関東地区における AA 研図書資料コレクションの意義と役割は益々重要なものとなります。

なお、AA 研所蔵の図書資料の利用方法については、AA 研のホームページ (<http://www.aa.tufs.ac.jp/>) 及び東京外国語大学附属図書館 (<http://www.aa.tufs.ac.jp/library/>) のホームページをご覧ください。



競争的研究経費などによる研究

本研究所では、通常の校費のほかに、臨地研究、アジア・アフリカの言語文化に関する資料や研究成果の情報化などをより一層推進する為に、「科学研究費補助金」や民間の財団による研究助成に積極的に応募して研究経費を獲得し、多方面にわたる研究を展開しています。また、最近では、民間機関などと共同で行う研究プロジェクトが発足し、研究成果のより実践的な応用等にも貢献しています。以下で紹介するのは、所員が代表者になって行なわれている種々のプロジェクトです。

H14 年度科学研究費補助金プロジェクト

研究種目	課 題 名	所員名	採択期間
基盤 A	サラワク先住諸民族社会における自然環境認識の比較研究	内堀基光	H12～H15
〃	ボルネオ及びその周辺部における移民・出稼ぎに関する文化人類学的研究	宮崎恒二	H13～H16
〃	海外学術調査・フィールドワークの手法に関する総合調査研究	石井溥	H13～H16
〃	地方独立制移行期マダガスカルにおける資源をめぐる戦略と不平等の比較研究	深澤秀夫	H14～H17
〃	アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態	梶茂樹	H13～H16
〃	協調的ユビキタス言語運用 e-learning 環境の研究	芝野耕司	H14～H16
〃	南アジア諸言語に関する基礎語彙・文法調査	Peri Bhaskararao	H12～H14
基盤 B	仏領西アフリカの植民地統治をめぐる住民側の記憶とその文字化保存に向けた調査	真島一郎	H14～H17
〃	1990 年代半ば以降のイスラーム世界におけるジハード理論の変容と実践の研究	飯塚正人	H14～H17
基盤 C	南部アフリカ人種関係史における「混血」と「クレオール」	永原陽子	H13～H15
〃	キリシタン文献国字本データベースに基づく字体・組版規範の研究	豊島正之	H13～H14
〃	ヌートカ語に関する未発表言語資料の分析・処理および公開	中山俊秀	H14～H16
〃	東アフリカ牧畜社会の土地と自然資源をめぐる認識・利用・領有に関する人類学的研究	河合香史	H13～H14
データベース	「言語学大辞典」データベース	町田和彦	H13～H15
特別推進 (COE)	アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成 (GICAS)	Peri Bhaskararao	H13～H17
若手研究	19 世紀における都市テヘランの発展と変容	近藤信彰	H13～H14
〃	中国法典形成史—国家法の非国家的形成に関する通史的な考証	陶安あんど	H14～H15
〃	ウダヤ大学所蔵バリ語ロンタル文献の転写・翻訳およびデータベース作成	塩原朝子	H13～H14
特定	言語の消滅・維持の動態論的研究	梶茂樹	H13～H14
〃	危機言語の記述とその動態論的研究—特に共通語との関係で	梶茂樹	H13～H14
〃	古典学のための多言語文書処理システムの開発	高島淳	H13～H14
〃	イスラーム古典における死生観と生命倫理の研究	飯塚正人	H13～H14
〃	19 世紀～20 世紀初頭におけるモンゴル出版文化の社会的考察	中見立夫	H13～H14
〃	北東シベリアとアラスカの古アジア諸語に関する緊急調査	中山俊秀	H13～H14

アジア書字コーパス拠点 (GICAS)



GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって平成13(2000)年～17(2004)年度の5年度にわたり約5億円の助成金を得て形成される「COE研究拠点」の一つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築します。

各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

GICASの活動は5年度中の2年目に入り、各メンバーが精力的に活動して、コーパスの構築・書字文化研究に努めています。

GICASは独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICASのホームページは<http://www.gicas.jp/>で、そこに初年度の研究成果などが公開されているので、是非ご参覧ください。

NEDO(新エネルギー・産業技術開発機構)との共同研究

- ・多言語処理技術の基盤整備(代表:星泉 H12~14)

H14年度その他各種財団助成によるプロジェクト

- ・日本人文化人類学者によるフィールドワーク・データベース作成と特性分析
(内堀基光/三菱財団)
- ・民族の共生にむけて～「差異」が実体化されるプロセスの研究(西井涼子/稲森財団)
- ・清朝宮廷満州語史料冊の整理と研究(中見立夫/サントリー財団)
- ・日本占領期ビルマ(1942-45)に関する総合的歴史研究(根本敬/トヨタ財団)
- ・オスマン帝国における国際・地域間コミュニケーション・システムの研究
(黒木英充/国際交流基金)

H14年度民間機関等との共同研究プロジェクト

- ・多言語機械翻訳システムの評価研究(町田和彦/国際情報化協力センター)
- ・イスラーム関連サイト収集プロジェクト(飯塚正人/国際情報化協力センター)

長期研究者派遣

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の習得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計36名が派遣されました。

- 1967-69 石垣幸雄 (エチオピア), 守野庸雄 (タンザニア)
- 1969-71 松下周二 (ナイジェリア), 家島彦一 (アラブ連合)
- 1971-73 内藤雅雄 (インド), 中野暁雄 (モロッコ, 南イエメン)
- 1973-75 福井勝義 (ソマリア), 中嶋幹起 (香港)
- 1975-77 加賀谷良平 (ボツワナ), 湯川恭敏 (タンザニア, ザイール)
- 1977-79 石井 溥 (ネパール), 藪 司郎 (ビルマ)
- 1979-81 羽田亨一 (イラン, トルコ), 清水宏祐 (アラブ連合, イラン, トルコ)
- 1981-83 山本勇次 (ネパール), 新谷忠彦 (ニューカレドニア)
- 1983-85 辻 伸久 (中国, 香港), 水島 司 (インド)
- 1985-87 中見立夫 (中国, モンゴル), 梶 茂樹 (ザイール, ケニア, ザンビア)
- 1987-89 松村一登 (フィンランド, ソ連), 宮崎恒二 (オランダ, インドネシア)
- 1989-91 林 徹 (中国, トルコ), 栗本英世 (エチオピア, ケニア)
- 1991-93 栗原浩英 (ベトナム, ロシア), 峰岸真琴 (インド)
- 1993-95 新免 康 (中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬 (イギリス, タイ)
- 1995-97 飯塚正人 (エジプト, イギリス), 黒木英充 (シリア, フランス)
- 1997-99 吉澤誠一郎 (フランス, イギリス, 中国, 台湾), 西井涼子 (タイ, イギリス)
- 1999-2001 澤田英夫 (オーストラリア, インド), 本田 洋 (韓国, イギリス)
- 2001-2003 床呂郁哉 (スペイン, オランダ), 呉人徳司 (アメリカ, ロシア)



150 の言語による主の祈り (パリ, 1805年) より, ローマ字転写漢語訳

新約聖書マタイ伝第6章の「主の祈り」を様々な言語に訳した本の一部で、漢語の声調を五線譜で表した興味深い資料である。ローマ字転写から官話系方言であることが窺われる。五線譜の左端には上から1, 5, 3, 4, 2の注記があり、1-4がそれぞれ普通語(標準語)の第一~四声にほぼ対応し、5は轻声に対応するとみられる。数字の順番は各声調の相対的高さを直感的に表したものであろうか。(澤田英夫)

言語研修

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語で、150時間を原則としています。これまで言語研修を実施した言語は、次の通りです(2002年度実施決定を含む)。

研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
1974	朝鮮語(10), チベット語(12)	
1975	カンボジア語(8), ベンガル語(12)	
1976	ペルシア語(10), スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1977	広東語(14), マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1978	タイ語(12), トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1979	ハウサ語(8), ビルマ語(14)	タイ語(7)
1980	ネパール語(14), モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシャ語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1993	朝鮮語(17), グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1994	ウオロフ語(9), ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1995	アムハラ語(5), チベット語(25)	上海語(12)
1996	タイ語(14), 現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1997	テルグ語(10), モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1998	アイヌ語(2), ハヤ語(11)	カナダ語(5)
1999	フィジー語(4), ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
2000	シャン語(3), アフリカーンス語(6)	ペルシア語(4)
2001	パシュトー語(7), 福州語(10)	ムンダ語(3)
2002	ネワール語(), バリ語()	タイ語()

言語研修の実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。(専門委員一覧 P. 14 参照)

研修は以下の能力の習得を目標としています。

- (1) 話し言葉, 書き言葉の能力
- (2) 言語の科学的研究と実際的応用
- (3) 野外調査を行うための手段としての言語能力

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。

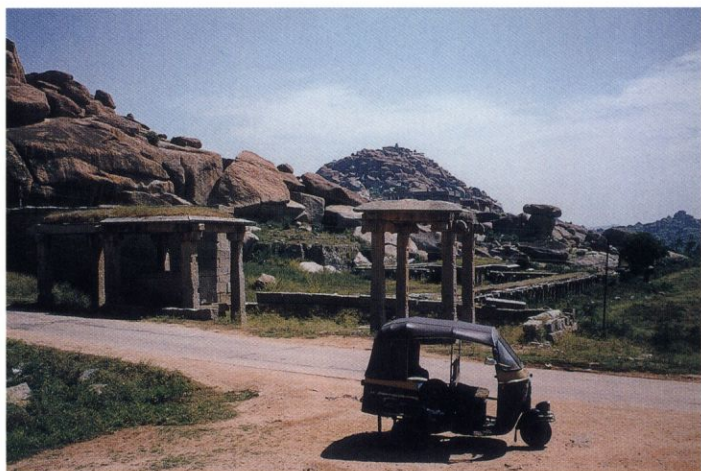
音声学解析

近代の音にかかわる科学，すなわち音声科学，音声学，音韻論等は音の物理量の測定と分析から始まり，その成果が現在の様々な理論に発展してきています。本研究所では，このような音の基礎研究に関する様々な分析や実験が行えるように，様々な機器を備えています。

現在，本研究所に備え付けている言語音の分析機器の主力は，パソコンとそれにインストールされている音声分析ソフトウェアです。テープレコーダやマイクロフォンからの音声を一時パソコンに録音して，そのパソコン内の資料をソフトで分析します。パソコンには Macintosh と Windows が用意されています。

どちらの種類のアナライズソフトも，サウンドスペクトログラフ，フォルマント周波数の測定，基本周波数の測定，音の持続時間，音圧測定等の音声分析に必要な物理量を自在に測定することが出来ます。連続した一つの音声資料(1ファイル)の録音時間は Macintosh でも Windows でも，44k 程度のサンプリングではほぼ1時間半から2時間録音できます。なお，このパソコンへの長時間録音だけに適したソフトも用意されています。パソコンの音声入出力装置としては DAT テープ，カセットテープ，DVD，MD，CD 等の媒体が利用できます。この他音声実験に必要な他の機器の導入も計画されています。また，現在は Macintosh には映像解析ソフトがインストールされており，VHS のビデオコーダを入出力装置として使えます。

なお，本研究所には，新キャンパス移転以前から，その時々日本における最先端の録音技術を用いて様々なアジア・アフリカの言語の語学テープを録音してきました。また所員をはじめとする研究者が野外調査で収集してきた世界の珍しい言語資料や，民話，民族音楽のテープやレコードも保管しています。新キャンパスへ移転後も，静かな環境で高品質の録音が可能な防音スタジオを用意し，録音機器としても DAT とカセットの高品質テープレコーダを備えています。



ハンピ遺跡

ハンピはかつてのヴィジャヤナガラであり，14世紀から16世紀までヴィジャヤナガラ王国の都がおかれた。城壁に囲まれた広大な市域内部と郊外には宮殿や水道，市場，そして無数の寺院が建設され，16世紀以降の度重なる略奪と破壊を経た現存遺跡群からも，かつての繁栄が偲ばれる。近年，観光地としての開発を目論む州政府が遺跡群の整備に乗り出しているが，その一方で現況保存を求める声も大きい。散在する遺跡群を廻るにはオートリキシャー（小型3輪タクシー）が便利だが，遺跡保護の観点からその乗り入れも近いうちに禁止されるかもしれない。

(1995年10月，インド，カルナータカ州パッラーリ県ハンピ村にて，太田信宏撮影)

大学院

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992(平成4)年度より設置しました。本研究所では教育体制のこうした発展に協力すべく、本研究所に大学院委員会を設置し、20名(2002年度)の教官が参加し、言語学・民族学・文化人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

これまで、本研究所の教官を主任指導教官として研究を行い、学位を取得した大学院生の氏名、論文題目、学位取得年月日は、以下の通りです。

学位授与者一覧(AA研)

2002年4月現在

授与日	氏名	学位論文題目
1995.3.24	Ricard T. Jose	Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942-1945: Focusing on the Rice Countermeasures
1996.3.25	鈴木貴久子	マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とするアラブ・イスラーム世界の食生活研究
1998.3.26	吉枝聡子	現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究－テヘランの場合－
1998.4.22	Soysuda Naranong	日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」について－日本語教育の視点から－
1999.3.26	榮谷温子	アラビア語における限定・非限定の意味と機能
2000.3.24	米田信子	マテンゴ語の記述研究(バンツー系, タンザニア)－動詞構造を中心に－
2000.6.21	小坂隆一	A Descriptive Study of the Lachi Language－Syntactic Description, Historical Reconstruction and Genetic Relation－
2002.3.26	鄧応文	1990年代における中越経済関係－国境貿易を中心にして－
2002.3.26	高久由美	漢字形成史研究－先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け－

日本学術振興会特別研究員(PD)

本研究所では、大学院博士課程修了者で、優れた研究能力を持つ若手研究者を、「日本学術振興会特別研究員(PD)」として受け入れ、本研究所の教官と共同研究を推進しています。今年度、本研究所に在籍する特別研究員は以下の通りです。

氏名	研究課題
小林直明	「マルチメディア民族誌」の提唱－『タンザニア都市民の生活誌』を題材として
青柳かおる	古典イスラーム神学・法学史－テキストデータの分析を中心に

研究生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、審査の上、研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。

研究成果の公開

研究の社会還元

本研究所は創立以来、全国共同利用研究所として、国内の研究機関に所属する専門研究者に設備や資料を提供する一方、共同研究プロジェクト等の開催を通じて研究交流の機会を作り、日本における当該分野の研究進展に大きな足跡を残してきました。しかし、国際化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の激化など、国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積に対する一般社会の期待は年々大きくなっています。そこで、本研究所もこのような期待に応えるために、1999年度からは、以下に示すように、研究とともに、「教育」型の社会還元を実施しています。

公開講座の実施

1999年度

本研究所主催「アジア・アフリカの文字がわかる」全8回16時間（10月9日～11月6日：10月23日を除く毎週土曜日に開催、講師は所員4名、客員1名、所外4名）

本研究所主催「アジア・アフリカの21世紀を読み解くために一人が動く、未来を開く」全8回16時間（11月13日～12月18日：11月20日、27日を除く毎週土曜日開催、講師は所員8名）

渋谷区教育委員会・上原社会教育館主催・本研究所後援 歴史講座「イスラームの国々」全8回16時間（9月21日～11月9日毎週火曜開催、所員1名）

2000年度

本研究所主催「東南アジアと20世紀—ナショナリズム・宗教・知識」全6回12時間（11月4日～18日：毎週土曜日に開催、講師は所員2名、所外5名）

本研究所主催「アジア・アフリカの21世紀を読み解くために—イスラームの民間信仰・聖者信仰」全8回16時間（10月1日～21日：第1回を除き毎週土曜日に開催、講師は所員2名、COE非常勤研究員1名、所外5名）

本研究所主催「チベット語とチベット伝統文化」（9月8日～3月30日、毎週金曜夜、講師は所員1名、所外1名）

文部省（当時）主催 「アジア—多様な文字へのまなざし」衛星通信による連続講座（エルネット）（2000年1月、2月 全4回 講師は所員5名）

2001年度

本研究所主催「現代チベット語講座1入門編」（6月19日から半年：毎週火曜日に開催、講師は所員1名）

本研究所主催「現代チベット語講座2読解編」（6月22日から半年：毎週金曜日に開催、講師は所員1名）

財団法人東京都勤労福祉協議会主催・本研究所後援「南西アジアの最新社会経済事情—イスラームの国々とインド」（7月：全8回16時間、講師は所員3名、所外1名）

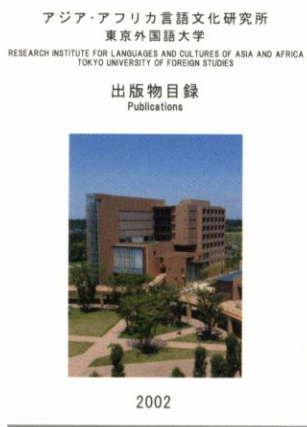
渋谷区教育委員会千駄ヶ谷社会教育館主催・本研究所後援「イスラム史」（1-2月：全8回16時間、講師は所員1名）

文部科学省主催「アジア—多様な文字へのまなざし：パートII」衛星通信による連続講座（エルネット）（2001年9月、10月 全3回 講師は所員2名、COE非常勤講師1名）

出版事業

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、また共同研究プロジェクトによる研究の成果を出版物として公開しています。研究所の出版物は、著作者・著作者からの事前の文書による了解が得られている出版物に限り、「オン・デマンド出版」による頒布を行う予定です。詳しくは研究所編集出版委員会 (editcom@aa.tufs.ac.jp) にお問い合わせ下さい。

なお、出版物一覧については、別冊の『出版物目録』あるいは、ホームページの「研究所の刊行物」欄(<http://www.aa.tufs.ac.jp/book/book.html>)をご覧ください。



- ・逐次刊行物
- ・アジア・アフリカ言語文化叢書
- ・アジア・アフリカ基礎語彙集
- ・言語研修テキスト
- ・言語調査・語学教育関連資料
- ・言語情報処理
- ・地域・文化研究：東アジア
- ・地域・文化研究：東南アジア
- ・地域・文化研究：南アジア
- ・地域・文化研究：西アジア
- ・地域・文化研究：アフリカ
- ・地域・文化研究：その他の地域
- ・地域・文化研究：広域

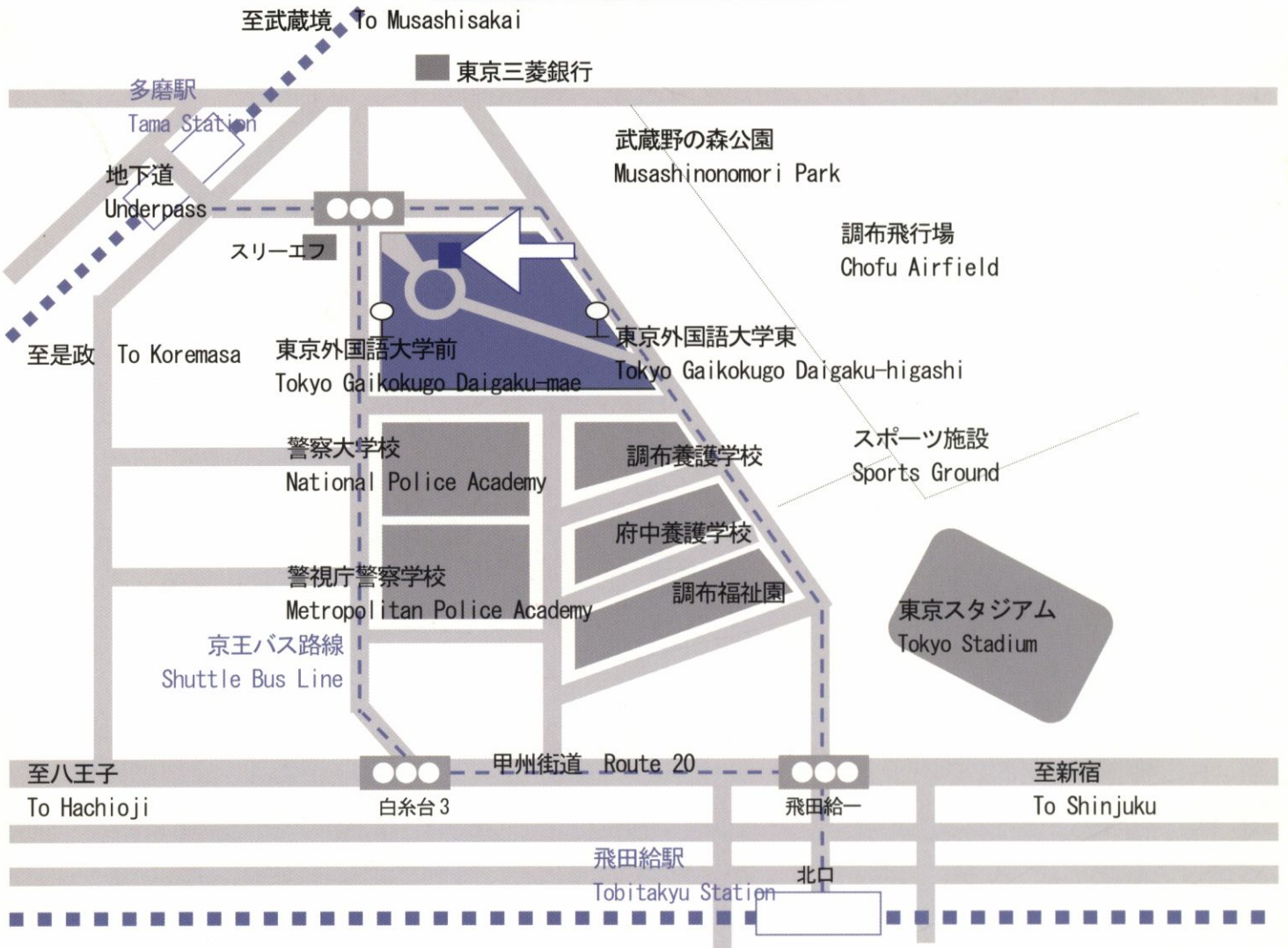
ホームページ

本研究所では、平成6年度からホームページを開設しています。本研究所の研究会の案内や研究活動の詳細、研究成果の出版物一覧など、最新の情報を提供しています。どうぞご覧ください。なお、個々の所員によるホームページも本研究所のホームページからアクセスできます。また、本要覧7～13ページにある「所員紹介」欄に掲載されたアドレスもご参照ください。

ホームページのアドレス：<http://www.aa.tufs.ac.jp/>

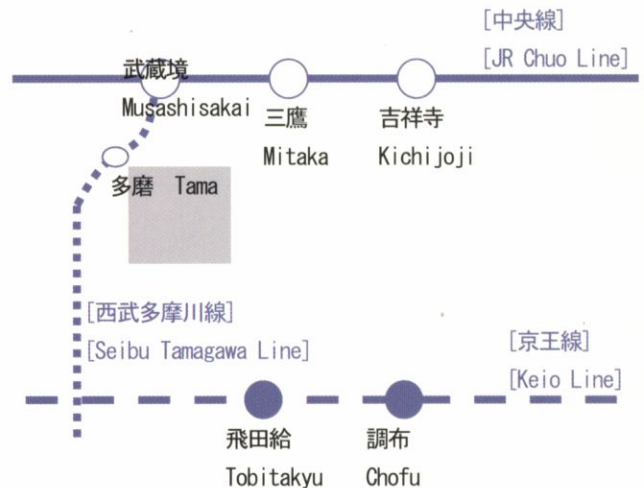


交通案内



【交通機関】

- ・中央線「武蔵境」駅から西武多摩川線に乗り換え
→西武多摩川線「多磨」駅より徒歩5分
- ・京王線「飛田給」駅より循環バス
東京外国語大学東停留所 下車徒歩0分 (バス所要時間約6分)
東京外国語大学前停留所 下車徒歩0分 (バス所要時間約10分)



アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
TEL : 042-330-5600 FAX : 042-330-5610

